
障害者でペテンでメカニック

Mirage wolf

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

障害者でペテンでメカニック

【Nコード】

N9048Z

【作者名】

Mirage Wolf

【あらすじ】

その一、主人公は障害者である。右目は異常なまでの視力であるが嗅覚と味覚は無い。その二、主人公はペテン師である。交渉において重要なのは相手を騙すことであり、嘘を吐くことは人間誰でも必要なのだ。ただ、度合いが通常よりも多いだけ。その三、主人公は機械がいじくれる。葬儀社と呼ばれるその組織ではかなり珍しい上に重要である。これら総てを踏まえたのが少々外見も性格にも難有る18歳である。

「モノクロと眼帯 Monochrome and one eye」

鼻をつく機械燃料と油、汗の臭い。今の時代には明らかに時代錯誤的な乗り物や機械。物言わぬそれらが黒い空間で乱雑に転がっていた。

現在、2039年という時代では10年以上前より大きな技術革新が進んでおり、旧世代の機械や乗用車、バイクなどは地球環境へと及ぼす悪影響などのことから残らず廃棄されている。何処かの家屋の倉庫に眠っているものも有るのかもしれないが、それが機械特有の伸びを上げて稼働する時はおそろくないだろう。

葬儀社 GHQによる他国支配から日本解放を目指すレジスタンス集団。悪く言えばテロ組織。まだ表立っての行動は其処までではないが、隔離されている六本木でその名を知らないものは限りなく少ないだろう。ましてやその首領たる恙神^{つがみ} 涯^がという少年を知らない者はおそらく居ない。

六本木フォートにある葬儀社の拠点。元々暗いそこだが圧倒的な暗闇の空間が機械などが乱雑に転がった、此処であり、名目上は倉庫暗闇で見取りづらいがそこには異形の巨人型機械が聳え立っている。その巨人の足元では大きくは無い人影がコンクリートの床に置かれた全体三メートルほどの何かに向かって手を忙^{せわ}しく動かしてた。

「コレは……ここで、ん？ この配線間違ってる……誰だよコレ組んだヤツ。ていうか、一回バラしたのかよ。道理でエンジンに何の問題もない割に稼働しないわけだ。有り得ねーよ」

がちやがちやと機械の内臓へと手を突っ込み血管である導線を繋げていく。度々携帯端末のディスプレイを確認しながら機械に手術を

施すその影は少年だった。

歳にして18なのだがあまり高くない背丈から幾分幼く見えてしまう。右目には事故か病気で患ったときにもらえるような白色の医療用眼帯がびったりと付いており、右目を隠している。しかし、目を引くのはそこではなき髪色だ。ちょうど胴体を半分に分割すると右が黒、左が白というなんとも言えない奇抜な髪色をしていた。顔立ちは明らかに日本系。半分だけでもちろんのこと染めているのではなくこれも右目と同じく障害の一部であるということに気付く人間は少なくないだろう。左の白髪は茶色い機械油のようなもので所々汚れており、大きな汚れは無いが色のせいで恐ろしく目立っている。スパナやらペンチやら現在では機械が全てやってしまい必要性の薄くなってしまった工具を慣れた手つきで操り、部品を無機質の身体へと差しこんでいく。カチリ！とプラグを組み合わせた瞬間、倉庫の巨大な扉が歪な音を立てて開いた。

「また機械弄りか……いい加減に寝る時間だ。区切りをつけて止めたらどうだ？ 漂よう」

そこまでの威力では無ければミサイルにも耐えられかつ軽量。今でこそあまり注目されていないが一昔前までの世界最硬軽量のマグネシウム合金の扉から現れ、呆れた声で呼びかけるのは長い金髪の美少年。どこか威圧するような風格とカリスマを纏った少年は実際のところ機械をいじくる少年、霧谷きりたに 漂ようよりも若いのだが年上に見えてしまう。この男こそ恙神つがみ 涯がいである。

組織の首領たる涯の呼びかけに答える声は無い。依然として漂は名指しで呼ばれるも工具左手に端末右手に機械を修理しているのだから造っているのだから作業を続けている。完全な無視だった。

ハア、とため息。怒るでもなく呆れ。涯は何度も何度もそれこそ数

「ハイハイ、今日も騙された俺の不幸でメシウマ。他人の不幸は蜜の味ってか？」

「話を聞け。で、どうなんだ。役立つものは造れそうなのか？」

話を聞けはお互い様だろうに。

漂は心の中で毒づくど先ほど放り投げたスパナと端末を暗闇で探し、拾い戻ると機械の身体へと再度目を向けた。涯も同じくソレへと視線を移す。

「1975年の木田技研工業製大型二輪。元のネームは『ヴァルキユリア・ルーン』。前にアメリカでの物資援助の交渉があっただろ？ あその時に廃車になってたヤツを頂いてきた」

「ほう……」

単車バイクのことなどほとんど知らない涯であったが、組織の役に立つものとなれば知っておくべきだろうと、興味深げにフレームの付いていない内臓丸出しの機械を眺めた。

今では道路を走らない二輪の機械馬は日本的なデザインではなく、アメリカから頂いたという言葉通りに旧日本が憧れたであろうアメリカンなスタイルの大型バイク。二人は乗れそうだ。

「中のプラグやら配線やらが少しイカレてたからつけ直して、つい

でにフレームはエンドレイヴの装甲を使うつもりだ」

「成程。だから皆にエンドレイヴの破片を集めさせていたのか。それは強化のためか？」

「That's Lighthouseだ、……っ」と

英語で涯に答えると機械の内部から手を離して直ぐ隣に置いてあった薄い青色の板を取る。スパンも工具箱へと戻し、代わりに人をぶっ叩けば気絶くらいはしそうな大きさのドライバーを取り出してフレームをボディへとはめこみながらこれまた大きい螺子で締めつけていく。その様子を涯は無言でただ見つめている。普段なら涯は直ぐ去るためにあまり気にならない漂だが、組織のためとはいえ作業を凝視されると集中力が途切れる。というか、涯の存在感が有り過ぎて背後に居ると物凄く気になるのだ。

……もしかして、寝るまで居座るつもりか？

端末に表示される時刻は……午前三時。

「げえ……もう朝になるじゃんか」

「だから言っただろう。二度目だがいい加減に寝ろ。俺も寝る」

踵を返すと涯は入ってきた扉へと向かいポケットに手を突っ込みながらヒラヒラと手を振って少しだけ灯の付いた道へと消え去った。

よく考えれば夕飯も摂っていない気がする。じゃなくて摂って無い……
味覚、嗅覚は無くても腹は空くし、もちろんのこと栄養失調にもな
って死ぬ。ただの障害者であって耐久力は普通の人間なのだ。

「……明日の朝は久しぶりに米かな」

ポケットに入った携帯食料の入ったビニールを取り出すと、一瞥し
てから戻し大きく欠伸してから倉庫を去った。重くも軽くないマグ
ネシウム合金の扉をきちんと閉めてから。

「モノクロと眼帯 Monochrome and one eye」(後書き)

畜生……綾瀬が可愛すぎるのが悪いんだからなッ!! いのりも好きですが…ダメだ…集さんの嫁と化している……。

ということと更新する際は綾瀬へのアレが爆発している時と云うことになります。(どうということだ!?)

ついでにバイクの名前は架空のモノですが「バルキリールン」というバイクはホンダから本当に出ています。

「美術の女神 Euterpe」

廃墟の教会。僅かに残ったステンドグラスを通して差す光が暗闇の空間を照らしている中で少女は唄っていた。

肢体に黒い翼を衣服のように纏った少女の周囲では鳥の^{カラス}ような漆黒の羽根がはらり、はらりと舞い落ちる雪のように地へと降り注ぐ。その少し離れた所には牛の頭蓋を仮面のように被った長身の人間が輝きのない瞳で虚空を見つめていた。それはどこか少女を冥府へと連れ去る死神のようにも見える。

「
、
、
……………」

唄う桃色の髪の少女、^楪いのりは尚歌い続ける。誰のために唄っているのかすら解らない。ただ、彼女の歌声に癒される人間は大勢いる。これから配信されるであろう映像を心待ちにしている人は十代半ばを中心にして数えきれぬ物ではない。

（少々音量調節が必要か？ だが、そこまでではないし、これ以上調節したら逆効果かもしれないな）

廃墟と化した教会内でヘッドホンをした^漂は右手で片側の耳を押さえて廃墟に幾つも設置されたマイク越しに伝わるいのりの歌声へと集中する。漂の目の前には数々のスイッチやボタンが計五十以上も

配置された物々しい機材が有る。その直ぐ隣には唄い手を正面から凝視するカメラの映像を映した小型ノートPCが駆動しており、空いている左腕でキーボードをカタタタタとタイプする音が繋がってくるくらいに高速で叩いていた。眼前のいのりと歌声へと集中している漂はPCのディスプレイなど見てはいないが正確な文字の羅列が画面の端へと表示される。

それは歌詞だった。目の前で唄う少女の紡ぐ言葉という感情を全て黒字として正確無比に打ち込んでいく。その唄の名はE u t e r p e
エウテルペ。

その名はギリシア神話の美術の女神と同じくし、「喜ばしい女性」という意味を冠する。

既に文化的に知っている人間も少ないかもしれないが、その名前タイトルはいのりとよく合っていると思った。普段無表情だが唄っている時の彼女は感情を声へと乗せているような気がする。あくまで気がするだけだが。

今のところ修正する点はない。既に唄もフィナーレへと向かっている。頃合いか、と置いておいた無糖炭酸水クラフトソーダに一口つけ、漂はノートPCへと繋いでいた四脚型ロボット、正式にはオートインセクト『ふゆーねる』なのだが重要なのはそこではない。漂はその頭部を掴み目の前の機材へと置いた。

「ふゆーねる、ツグミと繋いでくれ」

『何よ。いのりんがどうかしたの？』

声をかけてから約一拍置いてから声が耳をパタパタとさせたふゆー

ねるから響く。まだ幼い少女の声で実際に漂とは四つも歳が離れている。にも拘らずタメ口なのは性格というか、まあ気にしたら負けだ。

「ねーよ、こっちは何の問題もない。ただ、ネットの状況だ。もしかしたら動画を発信した時に探知される恐れもあるからな。で、かが何？」

『ちよつと待つて……今のところこちらを監視するような怪しい奴らは居ないわよ』

「オーケー。ちよつど終わった。編集はしておくから配信頼む」

『アイ了解』

通信が終わる。用の無くなったふゆーねるを元の場所へと戻し、顔を上げると床に座り込んだまま漂を見つめるいのりの姿が有った。一瞬、きよとんとするが口元に笑みを浮かべてぱんぱんと右掌で左掌を叩いて称賛した。それからヘッドホンを外してクラブソーダのボトル片手にいのりへと近づいた。

「お疲れさん。特に問題は無かったし、個人的にはもっと聴いていたかったな」

「……ありがとう。ヨウも機械のお仕事お疲れ様」

「いえいえ、どうも。こちらさんとしてはアイドルのお褒めの言葉が頂けるといふ至極歡喜極まりないものでして。これが生きがいと言っても過言ではございませんよ」

まるで育ちのいい人間のように右腕を大きく振り上げてから脚を滑らせて甲斐甲斐しく礼をする。声色と顔だけ見ていればそれなりに決まったのかもしれないが、薄汚れた群青の作業服と腰に巻きつけた葬儀社の証たる黒いジャケットをまるでスカートのように腰に巻きつけているさまではなんともし難かった。いのりも不思議な表情をするだけで何も言わない。シユールな光景だった。

「予測していたがここまで反応無しとは……中々くるものが有る。あ、骨の人…じゃなかった。四分儀のおっさんもお疲れさん」

「私はまだ27です。おっさんと呼ばれるには聊ちやうどか早い気がします
が？ 霧谷」

「そいつはどうもすいませんでしたー」

棒読みの漂に対してため息を吐くのは牛の頭蓋を被った男性。レプリカであるそれを外して晒した長い銀髪、容姿は若いとは言えない

かもしれないが瞳には冷えているようにも燃えているようにも見えた。

四分儀は眼鏡を懐から取り出すとそれを掛けてから改めて漂を睨んだ。その後、踵を返して漂といのりから離れていく。

「それではお二人とも、くれぐれも招集には遅れないように。特に霧谷は」

「りょーかい。今日は大切な日だってことくらいは覚えてるさ。そんな日に遅れるなんてことはねーよ」

そうですか、と四分儀。明らかに信用していない眼をちらりと覗かせて廃教会から去って行った。

くそう、今日は絶対に遅刻しない。そう心に決めるも漂の心中は様々なことで一杯だった。

ふゅーねるに次はどんな機能を追加しようか……いつそ弾丸でも飛び出すようにしておくか？ 一秒間に13発くらいの連射可能で尚且つ装填段数は100発ほど。いやいや、それでは少々派手さに欠けるか。ここは思い切ってノーマルグレネ ドとスタングレネ ドを二つずつ仕込んでからグレネ ドランチャーの機構を応用して発射するなんてどうかな？ しかしもしも内部爆発したら使用者が死ぬ可能性も無きにしも非ずだし、何よりも我が子が木端微塵になつて壊れるのは辛い。どうしようか……

様々な妄想を膨らませながら葬儀社の団員へと機材の片づけを支持して帰るか、と思いき出そうとした瞬間 腕をきつく握られた。銃を撃つてマメの出来た男の掌ではない。繊細で柔らかいながらも弱々しさを感じさせない戦場に立ったことのある少女の掌だ

った。

「……いのり。まさか帰りたくないとか、俺とそんなシチュエーションを期待しているわけじゃあねーよな？」

「?……ヨウはすぐに機械と遊ぶ。だから今日は倉庫に寄らせないで一緒に帰る」

「ちょ、マジで!?! 俺って倉庫に行けなかったら存在理由ないじゃん!?!」

「ううん、そんなことない。ヨウは強いし、頭もいい。何よりも私のプロデューサーでマネージャー」

「……そいつはどうも。申し訳無いがそんな役割はすっかりと忘れていたようだ」

そついや涯のヤツに言われてたなア……機械関係の仕事だと直ぐに本台を忘れてしまう。

腰に巻いていた黒い葬儀社ジャケットを露出の高い衣装のでしかないいのりの肩へと掛け、満足したようないのりに引っ張られながら漂は葬儀社のアジトへと歩を進めた。

レジスタンス組織である葬儀社の拠点、六本木フォートの地下には円柱型の空間が有る。

階層にして三層の空間は葬儀社で言ういわば司令部。作戦の案を指導者が団員に伝える場なのだ。円形の階層に集まる団員は全て下を向き指導者たる存在の言葉を聞く。指導者と言うのはいわば人の上に立つ存在、王がそうであるように本来高き場所へと有る筈の玉座や司令官の座する椅子などはなく、最下層が首領たる恙神 涯と参謀である四分儀がその地に立ち演説する場所となっている。

「 皆、揃っているな。では、これより作戦内容を説明する」

周囲を一通り見回した後、涯は高らかに声を上げた。逃げられないようにいのりが漂の腕を掴んでいたところを見た瞬間に鼻で笑ったのは気のせいではないだろう。

「諸君、この作戦は我々にとって開戦の号砲となる。つまりはGHQに対する我々の応報だ。その始めとして24区のセフィラゲノミクス研究施設へと侵入し、完成した遺伝子兵器を奪取することそれがこの作戦における最終目的だ」

涯がモニター下の機械を操作し、巨大化させたディスプレイに作戦内容を映す。モニターからその内容を理解した者たちが騒ぎ出す。歓喜、不安、恐れ。様々な”感情の形”が漂の瞳には写っていた。皆がざわめく中で声を一言も発さない漂といのり。その方向へと一瞬、涯が瞳を向けた。

「静粛に。高揚する気持ちは解るが、今は作戦内容を聞いてほしい。

さて、この作戦だが侵入、及び遺伝子兵器奪取には

いのり、お前一人でやってもらう」

涯の視線が再度いのりへと向かう。まあ、妥当だろう。ハッ、声を上げ漂は円形の階層全てを見渡す。

通常ならこの中の一人くらい「女の子を戦わせるなんてダメだ！」なんていう偽善者が居るものだが生憎と葬儀社はそこまで下手な人材を入れていなかったらしくそんな意見を出す存在は誰一人としていない。むしろ皆適任だと考えていることだろう。何せいのりの身体能力は皆把握している。

「主な支援は綾瀬のジユモウ。それと霧谷 漂に行ってもらおう」

エンドレイヴを操る綾瀬のところでは何のざわめきも起きなかったが、『霧谷 漂』という名が涯の口から飛び出した瞬間に再度ざわめきが起こった。一部の人間除いては「霧谷って誰だ」という声が主に囁かれている。それを予測していたのだろう、涯は漂へと視線を向けながら頭上で掌を叩いてざわつきを抑えた。

「一部メンバーは知っているだろうが、一応知らない者も多いようだ。紹介しておこう、つい最近までアメリカの企業に対する支援物資交渉のために一人国外へと飛んでいた整備兵^{メカニック}、そいつが霧谷 漂だ」

涯が指差すと二階に居た漂へと視線が集まる。やはり眼帯にモノクロの髪色というのは目立つようで奇異な物を見る視線も多々感じたが特に気にしてなどいなかった。涯はそれからエンドレイヴ『ジユモウ』の修理はアイツが主にやっている、とか機械全般の開発や修理はアイツが全て請け負っているなど詳しく紹介し始めたが、何故整備兵が全線での支援なのか理解していない者は多数いた。

「不満のある者も居るようだが、そいつの実力は折り紙つきだ。私が保証する。漂^{よう}、手加減なんてつまらないことなどするなよ。実力を団員へと示せ」

「悪いけど目指してるモンが同じな以上手加減なんてするほど甘ぢゃんな脳みそじゃねーよ。ノルマは達成するさ」

「……ふっ、その意気だ」

漂を一瞥すると涯は再び正面に向き直って高らかに声を上げた。

「皆の健闘を祈る。」

解散！」

「美術の女神 Euterpe」(後書き)

歌詞は掲載できないんですよ……中々辛いモノが有ります。
というわけで爆発したので更新です。
感想など頂けたら幸いです。

「直ぐ其処にある未来 Near future」

夜、24区のセフィラゲノミクス研究所とその付近で
作戦は開始されていた。

作戦の最終目的、遺伝子兵器たる『ヴォイドゲノム』奪取のために
いのりは既に侵入を開始、そしてヴォイドゲノムを手に入れた直後。

『あやねえ、漂っ！ いのりんの潜入がバレた！ エンドレイヴニ
機に追跡されてる！』

焦燥するツグミの声が耳に付けた通信機越しで響く。……了解、役
割は解ってる。

24区と東京を繋ぐ橋に待機していた漂は光学迷彩を解いてその姿
を晒した。普段右眼に付いている眼帯は何故か逆の左へと変わって
いた。隠されていた蒼色の瞳はじっと橋の向こう側、いのりと敵が
出てくるであろう排水溝と共有した出口へを見つめている。

「綾瀬、ゴーチェが二体。特に変わった武装は無し、あと二十秒も
有ればいのりも敵のゴーチェも橋に到達するぞ」

『解ったわ。本当に便利な瞳よね、それ』

「欲しければくれてやるよ」

遠慮しとくわ！

機械越しに綾瀬が叫ぶ。それを革切りとして漂は橋の上を走りだす。同時に迷彩を解かず風景と一体化したままのエンドレイヴ、綾瀬の愛機である『ジユモウ』が駆ける。姿は見えないが機械の走行音は確かに聞こえる。

約二十秒。漂が予測したとおりに出口からふゅーねるに先導されるいのりが姿を現した。もうひとつの予測も外れていない。折り畳まれたような姿を取る機械の巨人、GHQ量産型エンドレイヴゴーチエも登場した。その肩部にある巨大な砲門は前方へと、いのりへと向いている。拙いっ！

ふゅーねるの開いた頭部へと目的の品を納めていたいのりは止まっていた。無防備な獲物を鋼鉄の狩人は逃さない。ゴーチエは一旦動きを止めて、砲弾を放った。もちろんのこと狙いは決まっている。砲弾が筒の中から発射され、いのりのいる位置へと着弾する。その約一瞬を漂の瞳はコマ撮りのように一コマコマと区切りされているような動きで捉えていた。だが、今叫んでも仕方がない。幸いに着弾予想地点は彼女へと直撃するコースではない。懸念はそれよりも背後のもう一機だった。

「綾瀬エツ！ 手前の頼む！」

『言われなくてもっ！！』

叫びと共に素足で疾駆する漂を追い越して、いのりへと迫るゴーチ

エと衝突した。光学迷彩で隠された綾瀬の機体は相手に視認されない。衝突された敵操縦者は透明な壁にぶつかったような感覚になったのだろう、一瞬行動に戸惑いが見受けられるような動作をするが、直ぐに回復して迷彩の解けたジユモウと格闘を開始した。若干遅れてきた漂はいのりとのすれ違い様に叫ぶ。

「秒単位の時間稼ぎくらいしかできねえぞ、さっさと行けっ！」

「！ ふゆーねる！」

被弾した左腕を抑えながらふゆーねるに先導され走るいのりをちらりと確認すると、漂は両袖から一本づつ長い刀身の刃をシャコンという音と同時に引っ張り出した。二本のブレードは掌に握られると空気を振動させるような音を放って微弱ながら一秒間に何百もの回数、刃を揺らした。所謂、高周波ブレードと呼ばれる近代的ながら時代錯誤な兵器だ。

迫る二機目のゴーチエへと狙いを定めると一気に速力を上げる。突き出される巨大なマシンガンの銃口から発射される弾丸の着弾位置を計算してそこから一步先へと走り抜けていく。それを何十回と繰り返している漂にゴーチエの操縦者はコクピットで冷や汗をかいた。

人間技じゃない、と。

普通の人間だったら確かに弾丸を避けることなど不可能かもしれない。だが、訓練された軍人や異常な身体を持っている人間では有り得なくは無いかものだ。

霧谷 漂は後者。後遺症によって味覚、嗅覚、および視覚の異常、痛覚麻痺を患った代わりに通常の何十倍のアドレナリンが分泌される異常体質になってしまった。そのため『臨死体験』時に感じる背

景のスロー化、知覚の拡大などは戦闘する場合なら常時発動状態と
いうことだ。

「動きが鈍いんだよオツ！」

興奮状態で気がかなり高揚している漂が狂気のような叫びを上げ、
ゴーチエへと飛びかかる。

まずは右腕、懐に入りこまれた人間にエンドレイヴが対処できる筈
もなく、一瞬で右腕と胴を繋ぐ駆動部分を切り裂いた。いくらかな
りの切れ味を持つ高周波ブレードとはいえエンドレイヴの装甲部分
をまともに切っていたら少し時間がかかる。基本的に刃物での戦闘
は弱いところを狙うのが得策なのだ。

腕を切られたゴーチエの操縦者の悲鳴が遠く聞こえる。全てがスロ
ーに見える漂にとっては切り裂かれ落ちていく機械の右腕も踏み台
にしてくれと言わんばかりのものにしか見えない。滞空している
状態から右腕へと飛び移り、右腕から肩部まで飛んだ。そして両手
の刃が交差して機械人形の頸を切り落とし、赤い二つの瞳が光を失
う。

直後、ゴーチエのミサイルポッドが開いてい
ることに気が付いた。

操縦者がどうせやられると悟り、最後に目標の『遺伝子兵器』を奪
取したテロリストだけでも始末しようと、機能を失う直前の行動だ
った。今までスローモーションだった漂の視界が全て元の時間世界
へと塗りつぶされていく。ゴーチエの頸を切り落とした瞬間に無敵
の時間世界を誘発する鍵である戦闘時の異常の興奮から漂は冷めて
しまったのだ。今の漂は視力のみが7.0という異常な数値の”た
だの人間”しかもアドレナリンの大量分泌による代償として肩にか
なりの重力をかけられたような疲労感が襲う。

発射されるミサイル。橋を駆けるいのりの背中。異常な視力のせい

で三発のミサイルが爆発し、爆風がいのりを吹き飛ばす様がまるで手で触れられる距離のように感じられてしまう。飛ばされ、肌を道路に打ちつけながら転がっていき、そして橋の下へと

！

「いのりイイイイイイイイイッツツ！！！」

また見捨てるのか？ 助けられなかったなんて言い訳にならないんだよ！

ゴーチエの機体を蹴り飛ばして勢いを付けた漂は絶叫しながら橋の下へと落ちていくいのりの後を追った。だが、距離が有りすぎる。手をいくら伸ばそうが届かない。落下していく風の抵抗で眼帯がとれ、視界が壊れた双眼鏡のように変貌していくが気にもならなかった。ただ、その手を。悲痛の表情で伸ばされたその掌を……握りしめたかった。

だが、二人の掌は触れ合うことなく、互いに時間差をつけながら夜の河川へと身を投じた。飛沫も二人分上がる。

『あのバカッ！ エンドレイヴで抱えなきゃ10メートルも動けない身体にくせにいのりの後なんか追ってっ！』

ゴーチエを片付けた綾瀬のジュモウが橋の下を覗き込む。が、見つからない。そもそも夜の川では搜索環境が悪すぎた。帰
つて涯に報告しなくちゃ。いのりと漂のこともそうだけどヴォイド
ゲノムのことも。

(生きてなさいよ……いのり、漂……)

河川に落ちたためおそらく安全だとは思うが行動を共にしてきた仲間を心配せざるは得ない。綾瀬は光学迷彩を再度機能させ、逃走ルートを頭で確認しながらアジトへの帰路についた。

「ここは……使われてない大学施設か」

昼時、24区から逃げ出した漂はいのりを伴って人目に付かない通路を転々としていた。その過程でたどり着いたのが『封鎖区』。無断

で入ることは許されません。違反者は日本国憲法で罰せられる』と錆びれた看板の付いたフェンスで囲まれつつも入口はぼつかりと空いているレンガの建物だった。憲法で守られていた筈の『関係者以外立ち入り禁止』は既に意味を為さないだろう。

「ヨウ、一旦ここで休む？ ……辛そう」

「できればそうして頂けるとありがたいですがね……怪我しているのりよりもフラフラなのは誠に情けないのだが」

ふるふると首を横に振るといのりは漂の手を引っ張って施設内へと侵入した。

第一印象は汚い。もしも所有者や此処を気に入っている人間が居るのだとしたら申し訳ないが汚い。

床を突き破って生えた雑草、錆びた鉄骨。所々を浸蝕している苔や黴^{かび}。作業着の漂は別にいいが、特有の色彩をしたいのりの服が少々心配だった。

半乾きの作業着を脱ぎ捨て、上半身を露出させる。痩せているが筋肉の付きは悪くない。しかし眼を引くのはそこではなく、ギザギザした幾つもの模様だった。

それは模様ではなく、手術痕。無理やり切開し、大雑把に縫合した痕。それが上半身だけで約15以上もある。葬儀社でその理由と存在を知っている人間は涯^{はて}といのりだけ。見慣れているとはいえ、いのりはその痕を見て眼を伏せた。見ている気持ちはいいものではないし、むやみに見せる物ではない。

腰に巻きつけた黒いジャケットを素肌に羽織り、傷を隠す。視界の端ではいのりが鮮やかな色彩の服をはだけさせ、左腕の傷を露出さ

せていた。……幸いにも防水加工されていたポーチは無事で工具や応急手当用の包帯なども濡れた様子は無かった。

「……いのり、ちょっと染みるけど我慢してくれ」

こくり、頷くいのりの被弾した傷へと携帯用ケースに入った消毒液を塗り、馴染ませる。強力な消毒液だが、若干刺激が強い。一瞬いのりは顔を歪めるもやはり強い少女で、葬儀社の男団員に使った時は数分間絶叫されたが、いのりは声も上げずに一瞬だけだった。血と垂れた消毒液をティッシュペーパーでふき取り、包帯を巻いていく。機械の直し方だけでなく、人間の治療の仕方も同じように慣れている手つきだった。

「……ありがとう。……あと、ごめんなさい」

「今更別にいって。俺はお前のプロデューサーでマネージャーなんだろう？ アイドルの健康管理もしっかりとしておくのが仕事だ」

小さく咳くいのりに微笑んで返す。ああ、疲れたなア……ちよいとアクションが過ぎたかな。

光が差し込む窓際へと寄りかかりながら漂は地へ腰を付ける。逃走中に数分間休みを取ったので急激な疲労はやや回復していたもの、たったの数分で完全に回復するはずはなく疲労がどつと押し寄せてきた。戦闘後は基本的に動けないため通常綾瀬のジューモウで運んでもらうのだが、今回無理して歩いたせいか回復速度も遅かった。目

の前で唄っているいのりの声も有ってそのまま睡眠してしまいそうな感じすらする。……少し休もう。いのりの唄が終わるまで、少しの間寝ていよう……。
眼を閉じる。『Eut erpe』を聞いていたい気持ちもあるが疲労が今は勝っていた。まだ序盤、時間はまだある
筈だった。

「！？」

カンツ！ 小気味のいい音が狭い空間に響き渡り、来訪者の存在を知らせた。いのりは歌を止め、漂はとっさに右袖からブレードを抜いていた。ふゆーねるが来訪者へとワイヤーを放ち、その脚を絡め取る。

一瞬の行動に回避できない来訪者、茶髪で学生服を着た少年は背中から地へと落下し、弁当箱を落とした。いのりは警戒した表情で胸元を隠しながら後退していく。

(……拙いな。身体からだが動かない……)

咄嗟に武器を抜いたのはいいものの、肝心の身体が動かなくては意味がなかった。見たところただの学生、おそらくこの廃屋を使っている者かただ、偶然に見つけたのかは不明だがそこまでの警戒は必要ないと判断した。

だが、いのりは違う。他人と積極的に関わろうとしない彼女にはただの学生である来訪者の少年も敵に見えるだろう。

「あの……！ 違って、そんなつもり全然なくて！ 君、もしかして……！」

言動から『EGOIST』ファンだと解るその少年は落ちた弁当箱を拾っていのりへと近づく。逆に後退するいのりは背後にあるデスクの中へ逃げ込もうとして後頭部をぶつけた。その衝撃に反応し、デスクの上に乗ったPCが起動し、音楽とともにディスプレイに映像が映しだされた。

蒼い空に古い家屋から飛んでいく鳥、今でも昔でも希少な白い鳩。

「まだ途中なんだよ、僕の故郷の景色「綺麗……」……ええ？」

直後、ぐうと可愛らしい音で鳴くいのりの腹部。…ああ、そういえば夕飯も朝飯も抜いてたっけな。
味覚、嗅覚がないため食事に疎い漂は軋みを上げる身体を動かして少年へと近づく。

「
すいませんが……」

「わあっ！？ い、いつからそこに……って、誰！？」

「誰はお互い様ですが、一応そこにいる様 いのりのマネージャー

とでも言っておきます」

「は、はあ……マナージャーさんですか、それで一体……」

「生憎、こちらに食料は携帯食料しかありません。しかし、こんなものを彼女に食わせるわけにはいきませんので申し訳無いのですが、彼女に少しでもそれを分けては頂けませんか？それなりの費用は負担させていただきます」

「費用だなんて…そんなものいりませんよ。ちょうど、僕もおなかあまり空いていなかったものですから……マナージャーさんも食べますか？」

「いえ、私は結構です。親切なお心遣いに感謝します。え、と……」

「集しゅうです。桜満おうみん 集しゅう」

「では、桜満くん。ありがとうございます」

深々と礼をされ、逆に畏まってしまふ集。そのすぐ横で普段と180°違う漂の態度にいのりは不思議な表情を向けるが、依然として漂は完璧ながら胡散臭い笑みを浮かべていた。

「直ぐ其処にある未来 Near future」（後書き）

主人公の異常体質ですが、簡単に説明すると交通事故のすぐ直前つて脳が処理速度を上げて背景や車などが全てスローモーションのように見えるということを経験した方がいるかもしれません。それと同じです。常時それが発動していることで弾丸が飛ぶ位置も予測できるし、それを回避することも可能です。

……ただ、アニメで涯や集は生身でエンドレイヴの弾丸を回避していますか……

「拘束 Restriction」

集の渡した握り飯を食した後、いのりは二階で歌っていた。一方、一階で座椅子に疲れたように腰かけている漂。二階から聞こえてくるのは英国に古くから伝わる童謡、ナースリータイム何だっけな…壊れた橋を様々な材料で修復する。そんな歌詞だったと思う。

いのりの歌声が聞こえる中で集がいのりへと問いかける声も聞こえるが、依然としてのいのりは歌うことを止めない。少々可愛そうになつてきた。

集の話によればここは彼の所属する『映像研究同好会』の部室らしい。大学に許可は取ったのか？漂が聞くももちろんのこと答えは決まっている。Noだ。どうせ意味もないし、一応扱いが居候と言うものなので咎める理由も説教する理由もさらさらない。

ようやく回復してきた漂が錆びた金属製の階段を上る。登り終えたところで眼にしたのは両手の中で『橋』を造りたいのりがそれを集へと向けているところだった。いきなり向けられたのか、集はどうすればいいのか、と困惑している。ばつの悪そうな顔でマネージャーと認識している漂へと視線を移し助けを求める。

「取ってあげてください。彼女も喜びます」

につこりとした笑顔でそう返す漂。葬儀社ではほとんど見せたことのない貌。かお基本的な機械に向き合っているため見たことがないだけかもしれないが、やはり霧谷 漂という人物をよく知る人間にとつては下手すぎる演技だとわかった。いのりは首を傾げながら「どう

してそんな顔をするの?」とでも言いたげな眼だったが、答えることもなく漂は無視。集は未だに手を出すことを躊躇っている。

「やればできるかもしれない。でも、やらないと絶対にできない」

……? なんの話だ。あやとりか? 確かにあやとりは紐の取り方によって色々と形を変えるが……
淡々と言いついのり。本当にあやとりのことを言っているのかもしれない。だが、漂は何か別の事を集に問い掛けている気がした。もっと重要な、後々にまで関わるような深い出来事について……

「ごめんなさい。あなたの手は取れないわ。」

さようなら、
『もしも、また会えたら一緒に……』

「痛っ!」

刺激されるような足に痛みを感じた漂は脳内で再生されたフラッシュユバツクするイメージから抜け出していた。足元ではふゆーねるがバチバチと四本の足を鳴らしている。どうやら内蔵型スタンガンで攻撃されたらしい。……腐っても生みの親の片割れに対してそれはないんじゃないか?

腰を低くして機械の瞳を睨む。それに対してふゅーねるは脚を再度バチバチと鳴らして威嚇する。

「…………ごめんなさい。俺が悪かった」

スタンガン攻撃は痛覚が麻痺していてもそれなりに痛い。さすがに勘弁してくれ。漂は自らが制作した機械に頭を下げた。18歳にもなっている男が小さな機械に頭を下げる。なんとも言えないシュールな光景だ。

集は声をあげて笑いそうになる。直後

バンツ！ 乱暴に扉を蹴破る音が施設内に反響し、目元を隠し特殊なスーツと銃器を携えた屈強な男たちがぞろぞろと侵入してきた。発見が意外と早い！

ちっ！舌打ちすると窓を蹴破って脱出を試みようとする。だが、

「ふゅーねる！」

「……………バツ！いのりっ!?!」

「いのりさん!?!」

二階の手すりを飛び越え、一階へといのりは降り立つ。漂の制止は遅すぎた。下にはアンチボディアズの隊員たちが待ち構える中へといのりは飛び出していったのだ。逃げられない。逃げられる筈がない。

正面から獲物がわざわざ引つ掛かりに来たのだ。司令官のような色黒でサングラスをかけた禿頭の男を避けようとするも、いとも容易く捕まってしまった。気絶させるため隊員のアサルトライフルのストックがいのりの鳩尾へと突き刺さり、一撃で倒れる。そしてすぐさま何人も隊員が二階へと、漂へと銃口を向けた。

「もう一人いたか……大人しく投降するつもりはあるか？ テロリストといえども痛みは嫌いだろ？」

「……ええ、痛いのは大嫌いです。確かにね」

淡々と語るような口調の漂とは相対してテロリストという言葉に集が反応し、声を上げる。反応した隊員が銃を向け威嚇すると地に伏せて大人しく身を守る。別に臆病というわけではない。圧倒的な力を持つ兵器の前では基本人間はそんな反応だ。

『EGOIST』のマネージャーである漂は決して肉体が完成しているわけではない。だが、地に伏せる集にとって銃を前にしても態度を変えない存在は決して弱く見えなかった。このまま映画のヒーローのように近代へ気をもるともせず格闘して自分もいのりも助けられるのではないか？

意思を決めたのか漂は手すりを飛び越してアンチボディアの前へと踊り出る。口から吐き出される言葉は

「投降します。生憎と勝てないと解っている相手に挑むほど愚かではないのでね」

おどけた様に笑い、肩を竦めた後、こうさーんとも言いたげに両手を上へと高く上げた。姿は見えないが声で察した集は思わずえっ？と声を洩らした。

「ふん。どうやら物解りの良いテロリストもいるものだな。
拘束しろ」

司令官の男が支持する。部下の男たちが手錠を嵌め、自由を奪うことに何も抵抗しない漂。何でだよ、どうして何もしないんだよ！？ アンタはいのりさんのマナージャーだろ！？ どうして彼女を助けないんだよッ！ 集は叫びそうになった。見える部分はわずかだが、そのわずかな視界から見えた一部始終だけで集の漂に対する評価は一変していた。何であんな情けない男がいのりの傍に居るんだ、と。部下にデータ照合を終えさせた司令官は改めて気絶するいのりの顔を睨み、脚を振り上げる。

「テロリスト風情が！！」

「……………がふっ！」

いのりは気絶している。だが、声が上がった。何故なら蹴られたのはいのりではなく、漂だったからである。いのりの顔に直撃するほんの直前の位置へと黒と白の頭髮をした顔が割り込んでいた。

司令官の男はなんのつもりだ。と顔を歪め尋ねる。すると漂は再度おどけたように笑った。

「いやあ、ウチのアイドルの顔に傷なんて付いたら困るものでして……蹴るのならどうぞ私の不細工なものにしてください。割り込んで誠に申し訳ありません」

女性を庇った。それは通常称賛される行為だ。だが、蹴られた漂は謝罪する。ふんっ、と鼻を鳴らし司令官は一言、連れて行けと冷めた様に言い放ち部下にいのりと漂を連行させ、去って行った。

「くそっ!!」

金属を殴る音が響く。　　こんな俺でいいのか？　力の前に屈伏させられて女の子一人も守れない。　　涙が溜まる。こういう時は帰って寝よう。明日になれば忘れてる。　　また何も無い一日がある筈だ。　　銅製の床に寝転ぶ。集の視界には偶然か、必然か、いのりとそのマネージャーという男が残した四本足のオートインセクトが有った。

「拘束 Restriction」 (後書き)

遅くなりましたがあげましておめでとうございます。

中途半端に短い文章については……すいません。中々執筆に手付かずです。一羽がなかなか終わらないな……

感想、評価、ご意見などお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9048z/>

障害者でペテンでメカニック

2012年1月4日01時47分発行